

アラン・プラウト著、元森絵里子訳

『これからの子ども社会学
—生物・技術・社会のネットワークとしての「子ども」』

(新曜社、2017年)

山 田 富 秋

はじめに

本書は、2005年に出版された、Alan Prout, *The Future of Childhood: Toward The Interdisciplinary Study of Children*, Rotledge の全訳である。訳書のあとがきにもあるように、評者は本書の翻訳を出版社に紹介した仲介役をさせていただいた。幸運にも元森絵里子氏という適役を得て、丁寧な訳注とともに、本書が多くの読者の手に届くようになったことは望外の喜びである。評者は、プラウトも含めた「新しい子ども社会学」の潮流をなんとかして日本の子ども研究の舞台に登場させたいと長年考えてきた。その一部は「海外研究情報 イギリスの「社会的コンピタンス」研究」として『子ども社会研究』第5号(1999年, 139-140頁)に紹介させていただいた。評者はそこで初めて、1990年代にヨーロッパで勃興した「新しい子ども社会学」のパラダイムに触れ、この新潮流の牽引役としてプラウトの名前を知るようになった。よく知られているように、1990年に出版されたプラウトとジェームズの編著、A. Prout and A. James, eds., *Constructing and Reconstructing Childhood* (London, Falmer Press) は、まさに「新しい子ども社会学」の学派としての宣言として受けとることができる。

しかしながら、訳者も指摘するように、幸か不幸か、日本にはこの新潮流はほとんど紹介されてこなかった。日本子ども社会学会においては、1990年代に生まれた「新しい子ども社会学」に関心を持つ研究者のあいだで、小さな読

書会や研究会が細々と営まれてきたにすぎないのである。確かに一部では、現象学やエスノメソドロジーに影響を受け、相互行為の細部にわたる観察を基盤とした経験的子ども研究の流れは確実に起こっていた。あるいは、社会構築主義的な子ども研究も始まっていた。ところが、それをこの「新しい子ども社会学」の流れと結びつける意図的な努力は、残念ながら、あまりなされてこなかったのが事実である。

例えば、私の無知と怠慢をさらけ出すことになるが、私がプラウトの翻訳を訳者に奨励した理由は、社会構築主義的な子ども研究の大方針を、この「新しい子ども社会学」に見出したからだ。1999年の私の紹介文では「このパラダイムの斬新なところは、伝統的な発達心理学や、社会学における社会化論が前提としてきた、大人を到達点とした子ども観と決定的に快を分かち、「子ども期」が自然な現象ではなく、むしろ、歴史的・文化的に変化する社会的構築物であると主張した点にある」と断定している。ところが、プラウトはこの新しいパラダイムの特徴を、社会構築主義だけでなく、それに加えて、後期モダンになる前の近代主義的社会学から導入されたとする、社会構造の形式としての「子ども」と、主体の能動性を強調する行為者能力（エージェンシー）の3点としてまとめている（訳書、第3章、以下の頁数は本訳書のそれを示す）。結果的に、私が注目したのは、社会構築主義的な子どもの把握という側面にすぎなかった。実際、本書の出版に先だって訳者が翻訳したプラウトの論文「子ども社会研究はモダニティからいかにして距離を取るか」（元森絵里子訳、2014年、『子ども社会研究』第20号、119-135頁）にはざっと目を通していたが、近代主義的社会学の構造／行為体（エージェンシー）などの二分法を乗り越える必要があるというプラウトの主張、特に社会構築主義が言説を特権化した結果、自然と文化の対立が生み出され、それを乗り越えるために「包摂された中間部」（111頁）というユニークな概念道具を考案したことなど、その主張の核心部分については、本書を読むまではよく理解できなかった。

これから、私がいかにして「新しい子ども社会学」の構築主義的に偏向した読み方から脱却し、プラウトの主張をまっとうに理解するようになったのか、その道筋をこの書評の読者に示すことにしよう。それはある意味では、私が昔、子ども研究に関心を持ち、さまざまな子ども研究が紹介されるや、その都度そ

れらを吸収していった歴史的道筋をプラウトの観点から洗い直す作業でもある。おそらく、この学会の会員も本書を読めば、私と同じような経験をたどることだろう。そしてこの作業から、プラウトが提案する、「新しい子ども社会学」の次に来るべき、文化と自然の二分法を超えた子ども研究について検討することにしよう。

「新しい子ども社会学」の隘路

最初にこの学派の宣言となった、1990年に出版されたプラウトとジェームズの編著（A.Prout and A.James,eds.,1990）に要約された新しいパラダイムのスローガンを示すが、この学派に初めて接する読者にとってもわかりやすいだろう。（95-6頁）

- 1.「子ども」は社会的構築物として理解される。そのようなものとして、「子ども」は、人間生活の初期を文脈化する解釈枠組みを与えてくれる。「子ども」とは、生物学的な未熟さとは区別されるもので、人間集団の自然な特徴でも普遍的な特徴でもなく、多くの社会の特定の構造的・文化的な構成要素として立ち現れるものである。
- 2.「子ども」は、社会分析の変数である。階級やジェンダー、エスニシティといった他の社会変数と分離することはできない。比較分析や異文化間分析によって、唯一不変の現象ではない、多様な複数形の「子ども」が明らかになるだろう。
3. 子どもの社会関係は、大人の視点や関心とは独立に、それ自体で研究される価値がある。
4. 子どもは、自分たちの社会生活、身の回りの生活、自分たちの暮らす社会の構築や決定に際し、能動的とみなされなければならない。子どもは、社会構造や社会過程の単なる受動的な従属物ではない。
5. エスノグラフィーが、「子ども」の研究にとって特に役立つ方法論である。エスノグラフィーでは、実験やサーベイ型の研究で通常可能な以上に、子どもたちにより直接的な声を与え、社会的データの産出に参加してもらうことができる。

6. 「子ども」とは、社会科学の二重の解釈学が非常によくあてはまるような現象である。(Giddens,1976 = 2000, 松尾精文他訳『社会学の新しい方法規準』而立書房, 参照) つまり、子ども社会学の新しいパラダイムを宣言するためには、社会における「子ども」を再構築するプロセスに参加し、それに応答していかねばならないということである。

これらのスローガンには、プラウトが指摘するように、複数の、時には相容れない研究指針が同居している。私も子ども研究のスタート時によく読んだドライゼルの社会化概念批判 (Dreizel, H.P., ed. 1973, *Childhood and Socialization*, Jossey-Bass) が、歴史的にみると、このパラダイムの最初の生みの親になる。1970年代のアメリカ社会学において、エスノメソドロジーや相互作用論に影響を受けた研究者たちが、大人を到達点とし、そこに至る子どもを受動的に描く従来の社会化概念を批判した。1980年代に入ると、欧米に共通に社会構築主義や社会史が一大ブームとなり、自明視された子ども概念を徹底的に相対主義的視線にさらしていった。確かに、この頃には、子ども期の消滅がセンセーショナルに主張されたり、大人と子どもの区別を取り払ったかのように見えるメディアの影響が過大評価されたりした。ところが結果的には、子ども期が、ある特定の歴史的あるいは社会的文脈に位置づけられる、固有な現象であり、当の現象自体が言説を通して社会的に構築されるという関係論的で構築主義的な研究指針が広く受け入れられていった。次に1990年代に入ると、ヨーロッパでは Qvortrup など (Qvortrup, J. et al, 1994, *Childhood Matters: Social Theory, Practice and Politics*, Avebury) が、「子ども」を社会構造上の永続的特徴と見なす構造主義社会学の再興があった。そして最後に、フェミニズム研究を援用し、子どもを大人の抑圧下にあるマイノリティとして位置づけ、子どもの能動性や主体性を強調する流れがこれに付け加わる。

現在の地点から振り返って「新しい子ども社会学」の主張を検討してみると、このパラダイムが互いに矛盾する異質な論点の寄せ集めのようにも見えてくる。例えば、訳者も指摘するように、社会構築主義的な子どもの把握と、社会構造としての子どもの把握とは、明らかに相容れない。その意味では、このパラダイムに参集した研究者たちは「同床異夢」の状態だったのかも

しれない。プラウトは、構築主義的な子ども理解の中に、近代的な把握方法から脱却する可能性を一部認めながらも、これらの論点にはいまだに、近代主義的な二元論がつきまとっていると指摘する。実際プラウトは、バオマン (Bauman, 1991, *Modernity and Ambivalence*, Polity Press) の指摘に従って、デュルケームから始まる近代の社会学が、構造／主体 (行為体, エージェンシー)、ローカル／グローバル、アイデンティティ／差異といった対立項からなる二分法を用いて社会を説明しようとしてきたという。ところが、20 世紀の終わりに近づき、社会学は「近代主義的前提を掘り崩す一連の複雑な社会変化に」(98 頁) 必死で追いつくために、この二元論的捉え方を脱却し、さまざまな新しい理論の潮流を作り上げてきた。その中の一部に、プラウトが希望を見出しているアクターネットワーク理論や複雑性理論、あるいは、ドゥルーズとガタリのリゾーム論などが入ってくる。

このような状況を背景として、子ども社会学は二重の課題を背負うことになったとプラウトは指摘する。それは第一に「子ども」の場所を社会学的言説の中に作ることであり、第二に、後期近代における「子ども」の複雑さと曖昧さに向き合うことである。(同頁) ところが実際には、新しい子ども社会学が達成したのは第一の課題にとどまっており、第二の課題にはようやく取り組み始めたというのが実情であるという。その結果、第一の課題が後期近代に適合した理論的枠組みではなく、近代主義的な二元論の枠組みの中で行われるという隘路に陥ってしまったのである。それがいくつかの奇妙なパラドックスを子ども社会学の内部に作り出してしまった。プラウトは言う。

社会理論が、主体を脱中心化することで、後期近代と折り合いをつけようとしているまさにそのときに、子ども社会学は、子どもたちの主体性を認めようとしていた。また、社会学が、移動性や流動性や複雑性といったメタファーを探しているときに、子ども社会学は、構造としての「子ども」という大建造物を打ち立てようとしていた。子ども社会学は、まさにモダニティで進行している変化に適合した社会理論が構成されようとしているときに、モダニティの入り口に到達したのである。そして、近代主義的社会理論それ自体が、その概念範囲を超え出たり、それを無にしたりする社会変化によって破壊されつつある

ときに、近代主義的社会理論に追いつくべく駆けこまねばならなかったのである。(99 頁)

確かに、新しい子ども社会学は近代主義的な社会理論の残滓を引きずってはいないものの、その中でもプラウトは社会構築主義的な捉え方の中に、近代的な二元論を超え出る可能性も認めている。それは徹底的に関係論的で文脈的な子どもの捉え方である。すなわち、社会構築主義は「子ども」の複数性を強調し、「すべての現象が関係論的に産出される方法に関心を向ける」(100 頁)。その意味で社会構築主義は「近代主義的社会理論の二元論に直接挑戦しており、この意味で、子ども社会学の中での二元論の支配から逃れる方向性を示している」(同頁)。それにもかかわらず、プラウトが指摘するのは、それによって社会現象を社会的に構築するとされる「言説を特権的なものとして扱ってしまう」(同頁)のために、自然と文化の二元論を皮肉にも強化する結果を招いてしまったということである。すなわち、「それはまさに、生物学的要素、身体、物質性といったものを括弧に入れ、「子ども」の説明から放逐するという犠牲の上に成り立っていた」(137 頁)。

これからの子ども社会学

プラウトは社会構築主義的な研究の限界を指摘することによって、近代主義的社会理論の二元論を「包摂された中間部 (included middle)」という概念によって乗り越えようとする。2002 年にベルリンで開催された子ども社会学の会議において、子ども社会研究の現状が「行きづまり」に陥っているという共通認識のもとで、いかにしてそれを「生き返らせる」(108 頁)のかという方法について議論がなされたことも、この危機意識が広く研究者間に共有されていたことを物語っている。そしてプラウトの提案する解決策は「子ども研究の未来は、「子ども」を「自然かつ文化」として捉える方法を探すことにかかっている」(69 頁)という。そして、この試みを成功に導く「包摂された中間部」とは、イタリアのポッピオの考えに見られるように、「対立的に形作られた二分法の排除された中間部 (エクスクルーディッドミドル) に関心を向け、それ

を包摂しようとするのを助けてくれる」思考法であり、これを通して「子ども」は、自然あるいは文化といった、分離された二極のどちらか一方の極に簡単に還元できない、複雑な現象と見ることができるようになるのである。

そしてこの要請に答える理論のひとつは、アクターネットワーク (ANT) 理論である。ANT 理論が社会構築主義と決定的に違う点は、言説の果たす役割の重要性は受け入れるものの、根本的にマテリアリスト (物質主義) であり、社会というものは、異種混淆の素材がパターン化されたネットワークの中で、そしてそれを通して産出されると考えているところにある (113 頁)。また複雑性理論もまた二元論を回避する説明を提供してくれるという。例えば「構造の体系的な特徴は創発性であり、そこに生きる存在の行為者能力 (エージェンシー) と緊密に結びついている。このような「子ども」という構造は、一定の限界の中で相対的に経時的に安定していると言えるが、決して静態的なものではない。構造は常に動いており、ある条件の下では、ある位相から他の位相へと移ったり、ついには非常に予測の難しいものになったりもする」(121 頁) のである。

プラウトはさらに、訳者が親切な解説を施している「世代関係」、ライフコース、モビリティという概念を導入することによって、自然も文化も取り込んだ、言説と身体の交差するハイブリッドな世界として「子ども」を描き出そうとするだけでなく、進化生物学や霊長類学の最近の研究成果にまで言及し、「身体は進化的・遺伝的歴史とともに、社会的歴史を持っており、これらが共同的に生み出されることにより、これらの歴史は互いに溶け合」(170 頁) うと主張する。そして結論として翻訳の社会学が導き出されるのである。それは「社会が人間の行為と意味のみによって構築されているという前提を拒否」(177 頁) し、物質的なものを、社会を構成する他の要素との関係の中に位置づけ、社会が「異種混淆の素材のパターン化されたネットワークの中で、それを通じて産出される」(同頁) とする。

以上のように、近代主義的二元論を乗り越えようとするプラウトの議論の詳細について、さらに知りたいと望む読者は、本訳書を直に読んでもらうことにして、この訳書の紹介はここまでにするにしよう。最後に私自身がプラウトの試みに納得したのかどうかを述べて、締めくくりをしたい。私は、自然と

文化という近代的二元論を超えようとするプラウトのチャレンジ精神に大いに啓発されるとともに、いわゆる文系と理系の垣根を越え、文化と自然、そして言説と身体を架橋しようとする彼の冒険に大いに勇気づけられた。そして子どもという存在が、何よりも自然であると同時に文化であるというプラウトの指摘にも、納得するようになった。本書を読み始めた当初は、言説を特権化するとして批判の俎上に登った社会構築主義に対して同調的だった私も、ある意味では、自然と文化の両者を取り込んだハイブリッドな領域である霊長類と人間の「幼若期 (juvenility)」(第4章)の議論まで読み進めるにつれて、幼若期が人間において長期であるという意味を、生物学的理由や社会的理由に単純に還元することができず、まさに「自然と文化の境界を開いておく」(181頁)ことにつながっていくという指摘に納得するようになった。同様に、この学会の会員の多くが、プラウトの提唱する、自然と文化の二元論を超えていく学際的な「これからの子ども社会学」の展望について、それぞれの立場から検討されることを望みたい。評者の個人的な願望を述べれば、もし1990年代に「新しい子ども社会学」の紹介が日本において本格的になされ、2000年代における、欧米での子ども研究の「行きづまり」状況の共通認識が日本で共有されていれば、日本の子ども研究も欧米での子ども研究の流れに同時進行的に呼応できたのではないかと考える。しかしながら今や、本訳書が日本に紹介された以上、日本の子ども研究が国際的な議論に参加していく土壌は、これから作られていくだろうし、同時にそれが積極的に作られることを切に望みたい。